



周恩来の青少年時代

周恩来の青少年時代

胡 華

外 文 出 版 社

北 京

周恩来の青少年時代

1980年 初版発行

著 者 胡 華
出 版 者 外 文 出 版 社
(北京阜成門外百万莊)
発 行 者 中 国 国 際 書 店
(北 京 P. O. Box 399)

取 扱 店 東 方 書 店(東京)亜 東 書 店(東京)
中 国 書 店(福岡)(株)内山書店(東京)
(株)満江紅(東京)朋 友 書 店(京都)
(株)燎原書店(東京)中 華 書 店(東京)

番号: (日) 11050-132

11-J-1495P
00090

日本留学時代（1917年秋）

周恩来が1917年、日本留学前に作った詩で、1919年3月、帰国前に手書して友人に贈ったもの。

天津の覚悟社出版の雑誌『覚悟』

『天津学生会連合会報』を刷った印刷機。周恩来はこの印刷機で労働者といっしょに働いた。

1919年9月、周恩来は天津で『覚悟社』を組織した。写真は1920年、一部のメンバーの記念撮影。後列右1は周恩来、右3は郭隆真、前列右3は鄧穎超。

1920年、獄中釈放ののち撮影した
もの。第4列右2は周恩来、
前列右1は郭隆真、第4列右1
は于方舟。

ドイツ・ベルリンでの周恩来（1922年）

1922年、パリの中国
共産党在欧総支部事
務室前での周恩来。

中国共産主義青年団在欧
総支部出版の雑誌『少年』



一九二四年攝於巴黎

1924年、中国共産主義青年団在仏支部メンバーのパリでの記念撮影
前列左4は周恩来、6は李富春、1は聶榮臻、後列右3は鄧小平

目次

最初の訣別	1
国事への関心	6
素朴で真面目な学生	12
敬業楽群会	16
大江うたい罷めて	21
一条の光明をたぐって	23
ある印刷機の語るもの	30
戦闘ラッパ	34
嵐のなかから	40
省庁前の怒号	46
身を挺して	54
楊以德と知略でたたかう	62
鉄窓も真理を鎖せず	70

法廷での闘争	76
陶然亭の集い	82
上海からパリへ	87
フランス勤工儉学生の波瀾	91
リヨン大学への「進軍」	99
共産主義の旗のもとに	103
革命的友情	112
終生の誓い	115

最初の訣別

中国の東南部、淮河と大運河が交差するところに、水路が網目のように走る秀麗な平野がある。周恩來の生まれ故郷——江蘇省淮安県がここにある。

中学時代の周恩來はこの地についてこう記している。「淮陰はいにしえの名郡、江北の要衝を抑え、海禁の解かれざる清の時代には、北上する南省人の必経の要路なり」①と。たしかに、淮安と淮陰は、悠久な歴史をもつ古城であった。なかでも、淮安は古くから穀物の転送地として名高く、にぎやかな城下町だった。

周恩來の生まれた時代は、中日甲午戦争②の後で、中国がしだいに半植民地に転落していった

① 周恩來「射陽憶旧」による。「敬業」第一期に掲載。

② 一八九四年の日本帝国主義の対中国侵略戦争。旧暦甲午の年に起きたことから、史上、甲午戦争ともよんだ。

悲惨な時代であった。周恩來の故郷も、帝國主義の侵略と清朝（一六四四——一九一一）の封建支配のもとで荒涼たる地と化し、餓死者が相次いだ。

社会が大きく移りかわり、はげしく揺れ動いていた一八九八年の三月五日、周恩來は淮安県のある没落封建官僚の家で産声をあげた。本籍は浙江省紹興県、祖父①の代に淮安に移転した家柄である。周恩來が物心つく頃、この官僚の旧家はすでに傾きはじめていた。父親の周劭綱は長年、他省で小役人をつとめていたが、かせぎは微々たるものだった。母親は姓を万といい、やはり封建官僚の家の出で、周家に嫁いでくるとこの封建大家庭の家事を一手に切りまわした。周恩來には叔父が一人いた。間もなく叔母の陳氏を残して病死したが、この叔母には子供がなかった。一歳になったばかりの周恩來を養子にもらった。だから、幼時の周恩來には生みの母と育ての母がいたことになる。

一九〇四年、六歳になった周恩來は、生みの父母、養母それに二人の弟といっしょに淮陰（清江浦鎮）に移り、母方の祖父の一家と暮らすようになった。そしてこの祖父の塾で読み書きを習いはじめた。当時は清朝の試験制度がまだ敷かれていた頃で、学童は入学とともに孔孟の経書を

① 祖父の周攀竜は紹興県の師爺（役所の幕僚、秘書役）でのち淮安の県知事をつとめた。

暗記させられた。これは学童にとって、仕官の途を歩むため欠くことのできないものである。しかし周恩来はこれにはすこしも興味をおぼえなかった。祖父の家には蔵書がたくさんあった。周恩来が広く古今の小説を読み、歴史の知識をつみ、文学的才能をのばすには、もってこいの好条件だったわけである。

四、五年間、養母陳氏に励まされ教えられて、周恩来は中国の歴史物語をむさぼるように読み、同年輩の兄弟たちの間でもその博識と記憶力は抜きんでいた。中国の歴史には、異民族支配者の侵入に抗して自民族の氣骨を守り通したすぐれた民族英雄、民衆を指導して圧迫と搾取に抗した革命英雄があまたいるが、かれらの事績は少年周恩來の心を強くゆさぶり、深く焼きついたのであった。

子供の頃の周恩来はこの大家族のなかの最年長の孫であった。正月や祭日、双方の祖父の封建大家庭でもよおされる慶事や葬儀、誕生日や命日には、母親はきまってかれを連れて出かけ、ときにはもめごとの仲裁にも当たらせた。これは世間をみる目を肥えさせたといえ、孔孟に根ざしたわずらわしい封建的な礼節に、かれは大きな反感をおぼえた。没落してなおその体面を保とうとする古い風俗やしきたり、質入れしてまで祝いの贈り物をし、客を招いてごちそうするような虚礼や見栄にはとりわけ反撥した。子供心にも、封建的風俗・習慣に対する嫌惡感をつのらせ

たのである。

周恩來の九歳の年、すっかりおちぶれたこの家庭はもっぱら借財でその日その日を食いつなぐ有様だった。あまりの気苦労に、二人の母親は一年の内に相次いでこの世を去った。まもなく、一家はまた淮陰から淮安にもどった。わずか十歳の周恩來はしょっちゅう質屋に出入りするようになり、金持ちの家の門を叩いて、借金してまわらなければならなかった。ここでかれは金持ちの冷いあざけりをいやというほどなめさせられた。これまで権勢におもね、こびへつらってきた地主や紳士たちは人が変わったように、他人の災難につけこんできた。封建的礼教の虚偽と残忍、人の世の冷さ、人情の薄さは、血も涙もない金持ちに対する憎しみをかきたてずにはいなかった。家庭の没落によって、赤貧の苦しみをいやというほど味わわれる一方、搾取され圧迫されている広はんな勤労人民とも接触する機会を得て、旧中国の虐げられた労農大衆の生活苦とその血と涙の家史を知ることができた。それはかれの深い同情を引き起こした。

一九一〇年の夏、十二歳の周恩來は奉天省（いまの遼寧省）で經理の仕事をしていた伯父について東北へいくことになった。住みなれた故郷をあとにする周恩來の気持ちは淮河の水のように揺れ、波立った。かれは故郷の美しい景色を愛し、朴訥（ぼくたく）でせつせと働く郷土の人びとを愛していた。この意味で、かれは故郷に未練があった。同時に、かれはまた嫌惡（けんお）の情もいだいていた。か